

物語芸術論

伯彰一

語芸術論

谷崎・芥川・三島

講談社

佐伯彰一（さえき・しょういち）

1922（大正11）生れ。東大英文科卒。都立大教授を経て現在東大教授。ミシガン大学（アメリカ）、トロント大学（カナダ）等に招かれ日本文学を講義。

主要著書——『伝記と分析の間』（南北社）

『アメリカ文学史—エゴのゆくえ』（筑摩書房）

『内と外からの日本文学』（新潮社）

『日本人の自伝』（講談社）

『日本の「私」を求めて』（河出書房新社）

『評伝三島由紀夫』（新潮社）

『書いた、恋した、生きた—ヘミングウェイ伝』（研究社選書）

物語芸術論——谷崎・芥川・三島——

一九七九年八月二十日 第一刷発行

著 者 佐伯彰一

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―二二―二／郵便番号一〇二  
電話東京〇三三九四五―二二二（大代表）／振替東京八一三九三〇

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 黒柳製本株式会社

定 価 一三〇〇円

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします（文一）  
© Shoichi Saeki 1979, Printed in Japan

## 目次

|                     |     |
|---------------------|-----|
| 物語のなかの「私」           | 5   |
| 聖なる狂気 芥川龍之介 I       | 36  |
| 隠された母 芥川龍之介 II      | 53  |
| 物語を支えるもの 三島由紀夫      | 81  |
| 「生き方総体」の芸術家 谷崎潤一郎 I | 109 |
| 第二の語り手の誕生 谷崎潤一郎 II  | 134 |
| 語り、の戦略と成熟 谷崎潤一郎 III | 161 |
| 開かれた小説 谷崎潤一郎 IV     | 188 |
| 語りによる小説論            | 217 |
| あとがき                | 249 |

装帧  
上口睦人

物語芸術論

——谷崎・芥川・三島——



## 物語のなかの「私」

二つの寓話から始めたい。

寓話というより、じつはまぎれもなく挿話であり、実話であるが、この際は敢えて寓話として語りたい。いやむしろ、物語の誕生、持続にかかわる根源的な物語として提出したい。

一つは、『ロード・ジム』、『闇の奥』の作家ジョゼフ・コンラッドにまつわる話であり、いま一つは、ウィリアム・フォークナー、あの壮大綿密な「ヨクナパトーフ・サーガ」の語り手にかかわる挿話である。

コンラッドもフォークナーも、ともに無類の語り手であり、生涯綿々と語りつづけて倦むところを知らなかった小説家であった。その息の長さ、執拗ともいふべき両者の物語構築の意欲と実績については、今さらこと改めて言い立てるまでもないだろう。一八五七年生れのコンラッドと、一八九七年生れのフォークナーとの間は、ちょうど四十年、九一世代以上の時間が隔てている。かりに十九世紀小説、二十世紀小説という言い方をするなら、一八九五年に処女作を発表したコンラッドは、両世紀の境い目に生き、かつ書いた作家であり、その作風、文体の上でも、まさに十九、二十両世紀の過

渡期、つなぎ目に位置するといえる。フローベルの愛読者であり、とくに『ボヴァリー夫人』をくり返し読み、作者の故郷で、この小説の舞台ともなっているルーアンの町を眺めやりながら、処女作『オールメーアの愚行』を書きつづけたという。丁度コンラッドの乗組んでいた船が、ある事情でルーアン港に碇泊したまま幾週間も出港できなかったという事情も働いたのだが、後年の自伝的回想の中で、こうした事情をみずからの文学的出発の合図として感慨ぶかげに思い起している。つまり、十九世紀小説の中にとつぷりと身をひたしながら、はつきりとフローベル以後の小説の世界へと乗り出していった。

それから丁度丸一世代後の一九二六年に長篇の第一作『兵士の報酬』を出したフォークナーの方は、まぎれもなく二十世紀の作家であり、二十世紀もやがて八〇年代に踏みこもうとしている今日からふり返ってみれば、今世紀最大の小説家のひとりと躊躇うことなく言い切つてよい。二十世紀の代表的な小説家四、五人をあげようとする場合、フォークナーの名を除外することは難しいだろう。もちろん、人により、基準によつて、この選択はかなりのふれを示して当然だが、ジョイス、ブルーストとともに、フォークナーはまず誰しもあげざるを得ない筆頭のグループに属する。

しかも、コンラッドとフォークナーとの間には、何か根深い類縁がある。九四十年の時間的距離にもかかわらず、この両者はどこか通じ合い、つながる所がある。フォークナー自身の口から、愛読する作家としてコンラッドの名前があげられたのを耳にした覚えもぼくには残っているのだが、そうした個人的な因縁だけのせいではない。その重くて粘りづよい、形容詞や比喩を限りなく塗りかさねてゆくような、息の長い文体から、一面きわめて現実的な動きに富み、明確な劇的な状況をふくみなが

ら、たえずどこか夢魔的な雰囲気を持たせ、おかしな呪文めいた喚起力まで、奇妙なほど通じ合うものがあつた。いや、くり返しているが、この両者、ともに現代に類いまれな、本質的な語り手、蛻々としてほとんど尽きる所を知らぬ物語の紡ぎ手なのである。一九六二年、フォークナーが亡くなった時、追悼の小文の中で、「現代の語り部」という頌辭をささげた覚えがぼくにはあるのだが、これに似た面影は、『闇の奥』や『ノストローモ』の作家にもみとめられる。ともに小説技法上の大胆敢為の実験家、方法者ではあつたが、方法のための方法の駆使という殊更な技巧家からは縁遠かつた。とにかく憑かれたように、とめどなく語りつづけざるを得ず、構成や語り口の工夫は、いわばその後から息せき切つて追っかけているという趣きであつた。

一体ぼくは、何を言おうとしているのか。語り手は、もちろん頭、わす人であり、くまなく明かし、示そうとする人である。コンラッドもフォークナーも頭わし、明かす行為にその生涯を捧げて悔いなかつた。ともに、実生活の上ではむしろ寡黙な人柄であつたといわれるが、小説家としては、とめどない圧倒的な語り手であり、残るくまなく頭わしつくそうすることに総力を注ぎつづけた。

ところが、この両者は、ともに奇妙なほどに、隠す人であり、ほとんど限らない工夫をこらして自己隠蔽につとめたという印象すら禁じ得ないのだ。コンラッドには、なるほど『海の鏡』（一九〇六）や『思い出』（一九二二）といった自伝的な回想はあるものの、肝心の問題については頑なに沈黙を守っている。じつは隠そうために、語っているという気配すらただようのであり、フォークナーに至っては、この種の回想記など、ただの一冊も残していない。一九四六年、当時ほとんど読まれざる作家、忘れられた小説家となりかけていた彼に暖かい共感の眼を注いで、じつに丹念でユニークな選集

の編纂、出版の労をとって、いわばフォークナー再発見の端緒をなしてくれた批評家のマルカム・カウリーに対してさえ、その経歴のごく基本的な項目について、何やら言を左右にして確答をあたえなかったといわれる。たんに無造作、無関心という以上に、秘め隠すことに根深い執心をよせていたことは疑えない。

本質的な語り手・作家にあつては、どうやら語ることはまた同時に何かを蔽うことであり、顕わす術は同時に秘め隠す術に通ずるらしいのだ。

しかし、勝手な一般論、独断論よりはまず具体的な挿話を語らねばならぬ。一八七五年から七八年にかけて、つまり十代の終りから二十代始めごろのコンラッドについては、よく判らぬことが多い。一八七五年、十八歳の彼は、伯父の仕送りをおおぎながら、マルセーユにいて、船員を志しながら、気ままなボヘミアン生活を送っていたらしく、後年のいささか謹直すぎるほどのコンラッドからは、想像もつかぬような奔放な暮らしぶりであつたと推定される。しかし、後年のいわば悔い改めた中年、もしくは初老の男が、かつての若気の至りのいかがわしい過去について口をぬぐって知らぬ顔などという話ではないのだ。当時のコンラッドは金遣いもかなり荒かつたようで、伯父からの手紙でくり返し注意を受けている。しかし、いかにもロマンチックで冒険好きな青年船員らしく、友人二人と船を買いこんで、当時王位争いの起つていたスペイン向けにカルロス党員のために武器の密輸を企てたりもした。しかし、これはむしろ青春の誇るべき華やかな冒険の思い出であつて、当然回想にも小説の中にもとりこまれ、むしろ増幅された形で語られている。そこまでは、しごく当然の話で、かくべつ言い立てるまでもない。ところが、問題はその先にあるのだ。この武器密輸をめぐるロマン스風な小

説は『黄金の矢』（一九一八）であるが、この作品の青年主人公は、リータという美女をめぐる恋敵の軍人と争い、ついに決闘という破目にたち至る。そこで、左胸に相手の一弾を受けて倒れ、命はようやくとりとめたが、美女はすでに姿を消していたという筋立てであるが、すでに六十の坂をこした小説家による青春回想の小説として、いささか甘美すぎる浪漫化がほどこされていることは止むを得ない。ところが、コンラッド自身は、こうした決闘も、胸の負傷も、いずれもわが身にふりかかった現実の体験であったと、かねてから言い張っていたのだ。

これが果して事実であったのかどうかについては、今となつては、窮極的きめ手はない。ただジョイスリン・ベインズが精細な実証的伝記（一九六〇）を書き上げた際に、きわめて興味深い一物件を発見した。というのは、コンラッドの伯父の手紙で、これによれば、たしかに二十一歳のコンラッドは、胸に重傷を負うた。しかし、これは決闘ではなくて自殺をはかったためであったという。その時、電報で病院に呼びつけられたという実の伯父の証言を疑う理由はないだろう。

とすれば、その後のコンラッドは、何らかの理由で、自殺という事実を隠そうとした。少くとも、ひたすら「決闘だ」と言い張ることによって、自殺というみずからの行為を隠蔽しようと努めた——それも、ずっと生涯にわたって——と見る他はない。六十代にふみこんで書き上げた『黄金の矢』は、その観点からすると、彼の生涯にわたる隠蔽の努力の総仕上げ、その小説的な裏打ちとも見えてくる。一見甘やかでロマンチックな回想調のロマンスも、にわかに暗転して濃い陰影を帯びてくる。少くとも、一筋縄では割り切りかねるものが底に澱んでいた。

では、一体何のための隠蔽なのか？ 何故コンラッドは、自殺をひた隠しにして、みずから決闘説

を押して、それを貫くために、一篇の回想調小説まで物したのであるか？

ポーランド生れのコンラッドはカトリック教徒であり、この教義によればいうまでもなく自殺は、許し難い大罪であった。だから、という見方はやはり単純すぎるだろう。ペインズが指摘し、また数え上げているように、コンラッドの小説においては、主人公また重要人物で自殺をする人物がかなり多く、その際かくべつカトリック教徒的なタブーの意識はのぞいていない。どうやら、その理由は、もっと文学的、つまり小説家として、語り手としての基本の立場にかかわっていた。

ぼくの解釈はこうである。コンラッドの小説家として最も重要な独創は、マローウという名の語り手の設定にあった。『ロード・ジム』にも『闇の奥』にも相ついで姿を見せる、特異な粘り腰の、たえて興奮に駆られることのない冷徹無比の観察者<sup>11</sup>語り手であるが、こうした揺がぬ支点を定めることによって、彼の物語は、手ごたえ確かな基軸を獲得した。もちろんマローウはコンラッド自身ではなく、ただちに彼と同一視する必要もない。しかし、マローウは、いわば第二のコンラッドであり、語り手として恰好のマスクであったことは疑いをいれない。マローウを得て、物語の紡ぎ手としてのコンラッドは、始めて腰がすわったといっている。さて、この沈着なマローウは、自殺を試みた二十一歳のコンラッド自身のまさしく対蹠的存在ではなかったろうか。ポーランド人たる彼の眼に映った、堅固な良きイギリス的なものの集約でもあり、破壊にひかれ、陶酔にのめりこみがちな、衝動的な若者とはおよそ対極に立つ人間というべきであろう。こうしたマローウを、第二の作者自身としてしかと打ち立てるためには、自殺者、いや自殺未遂者としての過去は切り捨てられなくてはならぬ。一体、伯父の手紙によれば、二十一歳のコンラッドの「自殺」には、モンテ・カルロあたりで賭博に

持ち金をすってしまった経済的行きづまりがおもな原因で、狂言自殺のふしさえみとめられないではないという。決然たる、輝かしい捨身の一撃でなかったことだけは、ほぼ確実である。(失恋がからんでいたともいわれるが、その際も、相手の気を引こうための自殺未遂だったと伯父は見ている。)いや、事の真相は今となっては確かめようがないとしても、後年のコンラッドがこの自身の青春の行為のうちに、破滅にひかれ、自己放棄にのめりこむ危険な衝動をみとめて、これにはつきり否！を突きつけ、さらにはみずからの生涯から抹消しようと企てたとみるのは、心理的にも十分筋が通っている。しかも、倫理的な立場から若気のあやまちを裁き、切り捨てようとしたというより、語り手としてのいわば文学的、美学的な要請として、そうしたとぼくは言いたい。マローウという語り手に確固たる肉体をあたえ、リアリティを持たせるためにこそ、この切り捨て作業が必須のものだったと言いたいのだ。

さて、もう一方のフォークナーの場合は、一見これと正反対のように見える。コンラッドとは逆に、じつはしなかったことを、やったと言い張り、また信じこもうとしたらしいのである。フォークナーは、ヘミングウェイやドス・パソスとともに二十歳前後で第一次大戦に遭遇しすんで軍隊に加わり、「戦争体験」を共有したことから「失われた世代」という名でしめくくられもする。ヘミングウェイがイタリー戦線で、人事不省の重傷を負った話はあまりに有名だが、フォークナーにも相似た戦傷の体験があったかのように思いこむ読者は少くなかった。というのは、処女作の『兵士の報酬』の中心の主題が、戦争による傷という所にすえられていた。戦線で重傷を負い、ほとんど廃人同様になった飛行将校の帰還の物語であり、ほかに『サートリス』その他に空中戦の話が出てくるから、

これをそのまま作者自身の体験と受けとらぬまでも、おのずと、相関、類縁を思い描くのは自然な成行きであった。フォークナーが参加したのは英国空軍であったが、戦線を飛行中フランスに不時着して負傷したという話は、かなり長い間信じられてきた。先ほど批評家のマルカム・カウリーの名前を出したが、彼自身そう信じこんでいて、彼の編んだ『フォークナー選集』の序文には一たんその旨を書き記したという。

すると、フォークナーから手紙が来て、理由の説明はぬきにしてこのくだりの削除を申し入れてきた。これが、一九四六年、すでに第二次大戦後で、フォークナー、四十九歳の折の話であったから、ざっと四半世紀ほどの間、フォークナーの戦傷伝説は、アメリカ文壇で生きつづけてきたことになる。もちろん、作者自身として、わざわざ乗り出して、訂正を申し立てる義理はなかった、ともいえるだろう。間違えて、もっともらしい伝説をでっち上げるのは、粗忽な批評家、一般読者にはありがちな話で、小説家の方で、一々その度に異議申立てをするにも当たらない。なるほどそう受けとれば、一応筋は通るのだが、この際もつと入りくんだ事情が介在していたことを、たとえば最近出た、いかにも詳密な、時として詳密すぎるJ・プロットナーの『フォークナー伝』（一九七四）が明かしてくれる。もともとカウリーが採用したフランス戦線での不時着説は、ただの噂や伝聞ではなく、『二十世紀作家事典』の経歴の項に明記されてあったことである。ところが、フォークナーは、これに対しては何ら訂正を申し入れた気配もない。いや、そののみならず、こうした伝説を作り上げ、広めさえしたのは、他ならぬフォークナー自身であつたらしいのである。プロットナーは、この点をまことに詳密、執拗に追っかけて見せるのだが、二十歳のフォークナーが入隊し、訓練を受けたのは、カナダの

トロントで、ここですと六ヵ月間暮らした。フランス戦線への出撃など全く考えられもしない話であるばかりか、たかだか半年間の訓練では、自分で操縦桿をにぎる所まで行っただかどうかすら怪しいという。当時のトロントの空軍宿舎は、トロント大学のキャンパスの中にあつた由で、ぼく自身トロントで暮らした時、大学の雑誌で「カナダ時代のフォークナー」という論文をよんだ覚えがある。M・ミルゲイトというカナダ人の研究家が、丹念に当時の記録に当り、フォークナーの訓練仲間の話を逐一聞いて廻った、すこぶる実証的な研究であつたから、ぼくとして今さらプロットナーの「発見」に驚いた訳ではないのだが、プロットナーのつたえる除隊後のフォークナーの言動が面白い。除隊の際、わざわざ飛行服一そろいを買ひこみ、帰郷してから、何度もの恰好で人前に現われた由であり、訓練中に格納庫の屋根につっこんだとか、墜落して負傷したため頭の中にまだ金属片がめりこんだままだといった類いの話を友人たちに語ってきかせ、時折びつこまで引いていたフォークナーの姿を見覚えてゐる人もあるというのだ。

微笑ましい青年期のエピソードといつて、笑い流すことも出来るかも知れない。若い復員兵の無邪気な手柄話、自慢話は、なにもフォークナーひとりに限らない、一般的な心情、習性には違ひないのだが、フォークナーの場合は、これが後々までも尾を引いている。そればかりか、語り手フォークナーの誕生、生存に、この伝説化が微妙にかかわつてくるのである。プロットナーによると、これから十数年後、三十代半ばのフォークナーが、わざわざ飛行機操縦のレッスンを受けつけ、やがて操縦を物にして、自分で飛行機も買ひこみ、四十代末ごろまで単独飛行をたのしんだといわれる。これは、青年期の自分が作り出した伝説の、ほとんど意識的な補強作業、裏づけ工作ではなかつたらう

か。かつての手柄話、ほら、話を若気の至りとして忘れ、捨て去るのではなく、むしろ後からその証拠、裏づけをおぎなおうとした趣きである。戦傷伝説を我から否定することなく、韜晦や緘黙によってむしろその持ちこたえをもくろんだかのような態度と相通するものがある。いや、一層重要なのは、飛行中にかなり深い傷を蒙って、故郷に帰ってきた復員兵という自己イメージが、そのまま彼の小説の世界とつながり、重なり合っていたという点である。すでにふれたように第一作の『兵士の報酬』にも、第三作の『サートリス』にも、深く傷ついた復員兵の帰郷が描かれている。小説家としての出発のために、フォークナーは、こうした自己イメージを必要としたのではなかったか。

とくに注目に値するのは、『サートリス』の場合である。『兵士の報酬』の方は、その設定といい、筆法といい、いかにも戦後のな、一九二〇年代の幻滅とニヒリズムというはやりの風潮に調子を合せたという時世粧が目につく所がある。この一作だけならいわゆる「失われた世代」の身ぶりを流行にしたがって演じてみせたと言いい切りたくもなるのだが、帰郷する復員兵のイメージは、じつは『サートリス』にもそのまま引きつがれるものであり、この作品こそフォークナーにとって、家系の発見、南部の歴史の発見といった切実なモチーフをふくみつつ、「ヨクナパトーフ・サーガ」構想の端緒をなした小説であった。つまり、現代の語り部としてのフォークナーの出發が、ここに見定められたといつてよい。

とすれば、外なる世界で深く傷ついた若者による故郷回帰というイメージと姿勢は、語り手としてのフォークナーにとっては、欠くべからざる足場、土台ではなかったろうか。傷つき、故郷を見失った若者を一方の柱にすることで、彼の語り部としての姿勢がきまった。あの奥深く、陰暗な、南部